

# ヒビワレドリは蒼を想う

蒼葉ことり

夏の終わり、秋の初めの午後三時。住宅街、とある一軒家の前。人気もまばらなその中で、少年が見つけたのはアスファルトの上を飛ぶ鳥だった。

歩行専用の薄灰の空。その端でヒビが横に長く縦に短く、十字に伸びていた。ちょうど、両の翼をぴんと伸ばして空を飛ぶ鳥のようにみえたのである。

「お兄ちゃん」

少年は眼を地にやきつけながら、丸みを帯びた赤い頬を動かした。伸ばした指もまた短い。

「こんなところに鳥がいるよ」

花壇のコスモスに小さなジョウロで水をやっていた、もう一人の少年が顔をあげる。いくつか年上のようにはあるが、顔立ちは呼びかけた方の少年とよく似ている。ジョウロを持って、ゆるりと彼の後ろから、その鳥を見る。

「ああ、本当だねえ」

「どうして鳥は、こんなところにいるんだろう」

――これじゃあまるで、曇り空を飛んでいるみたいだよ。

その問いに、年上の少年はふうむと唸る。夏の湿り気がだいぶ薄くなった生温い風が、その間を通る。ふと、彼は空を仰いだ。ジョウロの水がはずみで滴る。ぽたぽたり。

「きっと、この鳥は蒼空が好きなんだよ」

地の空から天の空に、そしてまた地の空に視線を移す、小さな少年。

「でも、鳥がいるのは灰色の空だよ」

零れた雫で濃くなるその色。それはまるで、涙のように。

小さく息を吸い込む少年。その澄んだ黒い瞳には蒼が映る。

「……きっと蒼空が好きだからこそ、その鳥はここを選んだんだ。ずっと蒼を好きでいるために」

小さな少年は首を傾げ、もう一度天を地を――仰ぐ。

濡れた鳥、黒い地面。

それがきらりと映したのは――果てのない蒼だった。